大野城市歴史資料展示室　解説シート　考古No. 20

御陵前ノ椽遺跡

大野城市教育委員会

御陵前ノ椽遺跡は、中2丁目―御陵中学校南側の、まわりから15mほど高くなった丘の上にあった遺跡です。この丘を削ってテニスコートがつくられることになりましたが、遺跡があるかもしれないような場所だったので、試掘を行いました。予想どおり遺跡が見つかったため、1991年（平成3年）3月から4月にかけて本格的に発掘調査を行いました。

発掘調査前の御陵前ノ椽遺跡

7号甕棺墓

前ノ椽の「椽」という字は本当は「てん」と読むのが正しいのですが、地元では「えん」と読んでおり、それに従って「まえのえん」と呼ぶことにしました。

発掘調査の結果、弥生時代の甕棺墓が19基見つかりました。遺跡のあった丘には竹が生い茂り、その根によって甕棺墓はほとんど壊されていて残りはあまりよくありませんでした。

甕棺墓とは死者を入れる棺に大きな土器を使った墓ですが、実際には甕を使わなくても甕棺墓と呼んでいます。御陵前ノ椽遺跡の甕棺墓では、全部「壺」が使われていますが、これは弥生時代前期の甕棺墓の特徴です。御陵前ノ椽遺跡は前期の中頃（今から約2200年前）のもので、これまで見つかっている大野城市の弥生時代の墓地としては最も古いものです。しかも御陵前ノ椽遺跡の甕棺の形は最も古い型式で、この形の（この時期の）甕棺

15号甕棺墓

甕棺墓の記録図をとっているところ

墓は周辺を含めてもまだ多くはなく、貴重な発見となりました。

甕棺墓の古さだけでなく、御陵前ノ椽遺跡の発掘調査の貴重な成果は甕棺墓の中から小さな壺が出てきたことです。8基の甕棺墓から小壺が出土しました。表面に紋様をつけたものもあります。非常に残りが悪いですが、表面に赤い絵の具が残っているものも見られ、もともとは鮮やかな赤い色で飾られていた壺だったことがわかります。これらの小型の壺は、死者と一緒に甕棺墓に入れられたものです。墓に死者以外の物を入れることを副葬するといいます。小壺を副葬する風習は一般的に弥生時代前期に限られますが、前期の墓地で必ず小壺の副葬が見られるというわけではなく、これも貴重な発見でした。

市内では小壺を副葬していた遺跡として、他に中寺尾遺跡が以前から広く知られています。中寺尾遺跡も弥生時代前期の墓地ですが、御陵前ノ椽遺跡よりも新しく（後の段階）、前期の終わり頃のものです。副葬されていた壺も形が少し変わり、全体的に丸みを帯びた形になっています。中寺尾遺跡の副葬小壺は展示室の中に展示しています。ぜひご覧になってください。

復元した甕棺

副葬小壺